

# 朋誠堂喜三二作『龍都四国噂』翻刻と注釈

古庄るい

「キーワード ①黄表紙 ②朋誠堂喜三二 ③玉取り説話 ④昔話 ⑤童話」

朋誠堂喜三二作『龍都四国噂』は安永九年（一七八〇）喜こと、葛屋重三郎板から三巻三冊十五丁で刊行された。本作の刊年は『伊達ノ模様』見立蓬萊（安永九年刊）末尾「左に記す短尺の外題は則是子年新版」の中に「龍都四国噂 上 中下」とあることから分かる。加賀文庫蔵本の表見返しには原表紙にあったと考えられる「龍都四国噂 上」の題箋と、左上に「龍宮上」と書かれ、江戸町人姿の淡海公と海女が対面する場面を描いた絵題箋が貼られている。東京誌料本の表紙は麻の葉地に丸に菊模様で、棚橋正博『黄表紙総覧』前編（青裳堂書店、一九八六年）によると、三冊本とは別の袋入本が存在していたという。

画工についての記載はないが、井上隆明氏は『喜三二戯作本の研究』（三樹書房、一九八三年）において、恋川春町である可能性を示している。

さて、本作のあらすじについては以下の通りである。

「四国猿」の佐治兵衛は四国遍路の折に木の又に干されてい  
た柿（実は猿の生き胆）を食べて猿になる。唐から淡海公に贈  
られた面向不背の玉が鰐鮫に奪われ、海中の「とんだ靈宝」の  
開帳に出される。佐治兵衛猿は亀の誘いで竜宮に行き、役者の  
物真似芸を披露する。乙姫も竜宮城で佐治兵衛猿らの芸を見て、  
猿回し役の亀が市川八百蔵に似ていたことから恋に落ちる。一  
方、乙姫に一目惚れした佐治兵衛猿は亀を打擲して八百蔵に扮  
して乙姫と契るが、猿だと発覚して乙姫は気の病になる。猿の  
生き胆が効くと聞いた佐治兵衛猿は、自ら腹を裂いて胆を献上  
すると元の人の姿に戻る。折しも、面向不背の玉を取り戻しに  
竜宮にやってきた海女と遭遇し、共に陸へ帰還する。佐治兵衛  
は淡海公の家来となって子孫繁栄し、海女は国母となる。亀も  
竜宮に婿入りし、乙姫と結ばれる。

本作には童謡「四国猿」や童話「猿のいきざも」、玉取り説話の他、安永六年頃に行われた飛んだ靈宝の話や同年七月に天

折した二代目市川八百藏などが話の素材として用いられている。

まず、童話「四国猿」は当時の流行歌で、大田南畝の随筆『半日閑話』（成立年未詳）の安永五年の項に「○数へうた 此頃かぞへ歌の童話大に行はる。繋ければ二三を記す。此歌山の手より起ると云。愛敬いなるの隠し町辺よりなるべし。『一ツとや一ツ長屋の佐治兵衛どの四国を廻て猿となる お猿の身なればおいてきタンノウ』（『日本随筆大成』第一期第八巻、吉川弘文館、一九九三年）と紹介されている。平賀源内作『放屁論』後編（安永六年作九年刊）には、この唄をもとにした話があり、『龍都四国噂』でも冒頭に引かれ、佐治兵衛の人物像の基盤となっている。中村正明氏は「伝承童話と黄表紙―「四国猿」を中心に―」（『國學院雑誌』第一一〇巻一―号、二〇〇九年）において、本作が「『四国猿』の内容をもっとも作品に活かしている」と評価する。

次の童話「猿のいきぎも」は、乙姫の病のために亀が猿を謀って竜宮へ連れ出して生き胆を取るはずが、門番の海月が計画を漏らしてしまったために、猿に逃げられ、海月は骨を抜かれるという話である。原話は仏教説話で『今昔物語集』巻五・二五「亀為猿被謀語」にもあるが、近世では赤本「猿のいきぎも」や黒本「亀甲の由来」、平賀源内作の談義本『根南志具佐』（宝暦十三年（一七六三）刊）などで取り上げられており、当時は定番の童話だったといえる。『龍都四国噂』では佐治兵衛が乙姫の為に、食した猿の生き胆を取り出したことで元の人間に戻り、玉取り伝説の海女を助けて陸に戻るという喜劇的な結

末である。棚橋正博氏が『黄表紙総覧』前編において、「切腹して話の展開をはかる趣向は、同じく喜三三作の『親敵討腹敷』（安永六年刊）の焼き直しでもある」と説明しているが、生き胆を取り出す厳粛で悲劇的であるはずの場面でナンセンスな笑いを誘うのは喜三三お馴染みの趣向であった。

また、玉取り伝説も藤原淡海公不比等と契りをつ結んだ海女が竜宮に奪われた面公不背の玉を取り戻す過程で命を落とす、という悲話であるが、それを『龍都四国噂』では「四国猿」や「猿のいきぎも」との綯い交ぜによって、海女を生還させている。こうした既存の物語の結末の改変や御都合主義でめでたい展開に持っていく辺りは草双紙らしいところである。

そして、飛んだ霊宝のパロディー場面では、魚目線で当時流行した見世物を描き出すことで、そのグロテスクな部分を浮き彫りにしつつ、当時の見物たちを茶化しているところが笑いとなっている。ちなみに、「四国猿」や飛んだ霊宝は喜三三作『桃太郎再駆』（天明四年刊）にも再び素材として用いられている。さらに、作中における二代目市川八百藏の扱いについては、佐治兵衛が竜宮で役者の真似事をする場面において、二代目八百藏の追善本等の地獄めぐり譚を思わせる構成になっているのも見どころであろう。

本作との関連で言えば、他にも恋川春町作『其昔龍神噂』（『四分ろく分』安永七年刊力）の影響が指摘されている。また、竜宮関連の黄表紙を挙げればきりがなが、類話に『当世四国猿』（鳥居清長画 伊勢治板、安永六年刊）や『四国猿後日

曲馬きまぐま』(同上)がある。一方で、『龍都四国噂』が影響を与えた作品として、棚橋正博氏は前掲書で蝸牛房屯作『立帰猿人真似まね』(天明三年(一七八三)刊)を挙げている。また、中村正明氏は「黄表紙『蒲島が帰郷かきかへ猿蟹遠昔さるかにあむかし』考―素材と趣向について―」(『國學院大学大学院文学研究科論集』二九号、二〇〇二年三月)において、恋川春町作『猿蟹遠昔さるかにあむかし』(天明三年刊)も直接的な影響を受けていると指摘する。

『龍都四国噂』の刊行背景については、浜田義一郎氏(『黄表紙雑考―安永年中の画工、作者および版元について―』『東洋大学紀要』一四集、一九六〇年五月)、鈴木俊幸氏(『葦屋重三郎』まんぼう社、一九九八年)により、安永九年に葦屋重三郎が葦喜の名で初めて黄表紙を手掛けた看板作品の一つとして刊行したと指摘されている。ただし、本作は同年刊行の喜三二作『鐘入七人化粧かねいりしちにんげしやう』や『廓花扇之観世水くわはなあふぎのくわんぜんみづ』のように、当時の評では特に触れられておらず、改題本も確認されていないところから見るに、刊行当時、評判作となるには至らなかったのだろう。

作品評価では、森銚三氏が『黄表紙解題』上(中央公論社、一九七二年)の中で、

古い玉取り説話と、新しいはやり謡とを結びつけ、佐治兵衛の腹の内へ、面向不背の玉を収めて上るといふのが、黄表紙一流の趣向で、奇を極める。強ひて三卷十五帳に纏めるために、本筋になほむだな筋を附加へてあるものだから、全体的には散漫な感じなものにしてしまつて居り、その点

が惜しく思はれる。

と述べており、一定の評価をしつつ、厳しい指摘もしている。

一方、井上隆明氏は「喜三二戯作本の研究」の中で、他愛のない赤本種だが、喜三二流の明快な洒落、付合がさりと生かされ、「ちぎる」のきわどい語もさりげなく、江戸前仕立てである。

と述べており、昔話を取り入れた古風な筋立てながら、細部まで気を回しつつ軽快さもあることを評価している。

#### 書誌

- ・底本 東京都立中央図書館特別文庫室所蔵 加賀文庫
- ・表紙 後装表紙 (鼠色で地紋あり)
- ・題簽 龍の都四国の噂 全
- ・左図 表見返しに原題箋「龍都四国噂 上」と絵題箋あり



- ・書型 中本・袋綴
- ・柱題 「四国噂」

紙数 三卷三冊・合一冊十五丁。

作者 喜三三戯作〔喜三〕印

画工 なし

板元 蔦喜(蔦屋重三郎)板。

刊年 安永九年(一七八〇)

諸本 国会図書館、東京都立中央図書館加賀文庫、東京誌料、早稲田大学図書館。以下、未見の所蔵本に大東急記念文庫、果園文庫、旧安田文庫がある。

\*翻刻 なし

### 凡例

一、翻刻にあたっては次のような方針によった。

(イ) 原本の平仮名表記は適宜漢字を当て、もとの仮名はルビとして補った。

(ロ) 漢字は原本通りとしたが、異体字は現行漢字に改めた。

(ハ) 適宜濁点、句読点を補った。

(ニ) 原文の仮名遣い、送り仮名の不備などはそのままとした。

(ホ) 誤字・誤刻と思われる字には右に「(ママ)」と記し、脱字は「( )」で補った。

(ヘ) 反復記号「く」「、」「、」はそのまま表記した。

(ト) 会話の主体は「( )」に入れ、詞に「」をつけるが、原文にある場合はそのまま記した。

(チ) 翻刻、絵の横には「( )」に入れて対応する丁数や表裏を示す。(例：一丁裏・二丁表の見開き↓〔二ウ・二オ〕)

(リ) 見開きで一画面とする部分では、丁をまたいで詞書きや

台詞が書かれているため、文脈に合わせて表記した。

二、語注は小漢数字で表記し、画面等の説明は適宜\*印以下に述べた。また、語注の補足については(参考)に記載した。

付記 本稿を為すにあたり、延広真治先生をはじめとする近世

文学研究会の皆様より細やかなご指導、ご教示を賜りました。心より感謝申し上げます。また、図版掲載を許可くだ

さいました東京都中央図書館特別文庫室に深謝いたします。

### 〔二オ〕

昔く、一佐治兵衛といふ者、一つ長屋の者と四国遍路に出、讃岐の国の山奥にて飢に付かれしに木の又に柿のやうなるもの



一オ

を干して置きけるを喰ひければ、これ猿の生き胆にてありし故、  
たちまち猿となりける。連れの者も驚き、「猿の身なれば、置  
いて来たんのふ」と唄にも唄ひける。

(佐治兵衛※以降)「扱く、二ひだるいことかな。これは三廿干

(し) 知らぬ。四まで、これでも喰いませやう。」

○語釈 (一) 童謡「四国猿」の登場人物。連れの台詞も童  
謡に拠る。(二) 空腹であること。(三) 洪柿の皮をむき、干し  
たもの。「ぼ」の字以降が欠けたか。(四) 「ます」の誤刻か。

\* 連れ衆は松の根本に腰を下ろして休み、佐治兵衛が松の間  
に挟まる実に手を伸ばしている。

〔一ウ・二オ〕

天智天皇の御時、一唐土より華原磬、泗浜石、面向不背の玉と  
て三つの宝を渡されしに、讃岐の国の沖にて二大きな鰐現れ  
出で、舟を留め、玉を渡せといふ。皆く恐れをなし、華原磬、  
泗浜石の内一ツ渡さんと言ひければ、玉を渡さずは此舟を覆へ  
さんと怒る。

(船頭)「三命が物種じや。玉をあげませう。」

(鰐)「なんだ四華原磬とは機嫌買いの地口か、五泗浜石とは年

寄りの小便壺か、そのやうな無駄なものはいらぬ。」

その六面向不背の玉を渡せ、替へ玉は受け取らぬぞ。」

○語釈 (一) 謡曲「海士」では唐の皇帝の后となった淡海  
公の妹(幸若舞「大織冠」では次女)が興福寺に三つの宝を寄  
進する。(二) 鰐鮫。謡曲「海士」にも登場する。「鰐が見入れ



二オ

一ウ

る」という言葉があり、鰐が船の行く先を塞いだため、積荷を  
下ろす話が『諸国百物語』(作者不詳、延宝五年(一六七七)刊)  
巻之五、三にもある。(三) 諺「命有つての物種」。命あればこ  
そ。(四) 華原磬は中国陝西省華原産の石で作られた打楽器。

ここでは機嫌取りの意である「機嫌買い」の地口である。江戸語の連母音音訛により、「きげんけい」と発音することで響きも似ていたか。(五) 中国山東省泗水の河岸から採掘された石で硯や磬に用いる。「尿瓶」の地口。喜三三作『誤歟大和功』(天明三年刊)にも同様の洒落がある。(六) 謡曲「海士」「玉中に釈迦の像まします。いづかたより拝み奉れども。同じ面なるによつて。面を向かふに背かずと書いて。面向不背の玉と申し候」

\* 鰐が面公不背の珠を奪う場面は芝全交『大違宝船』(天明元年刊)、森羅万象『不背御年玉』(天明七年刊)でも踏襲されている。『当世四国猿』に同構図で蛸が謡曲「海士」の三つの宝に見立てた三人の娘を奪う絵もあり、黄表紙でも「海士」を取り上げる際の定番の構図となっていた。

〔二ウ〕

一藤原淡海公、玉を竜宮へ取られし故、身をやつして志度の浦の海士と契りだち、玉を取り返さんと心をつくし給ふ。

(淡海)「おれは二天のきありなれど、そなたはその三鮑の片想

ひであらふの」

(海士)「四なぶつて海松貝といふお腹でござんしやうね」

○ 語釈 (一) 鎌足の第二子、藤原不比等の諡。玉取り説話に房前大臣の父として淡海の名が登場する。謡曲「海士」「今の大匠淡海公の御妹は。唐土高宗皇帝の后に立たせ給ふ。(中略)大臣御身をやつし此浦に下り給ひ。いやしきあま乙女と契



二ウ

をこめ)(二) 明和頃の流行語「大の極」か。大いにもてること。(三) 鮑が二枚貝の片側だけに見えることから、片思いの修辞。(四) 「なぶつてみる」と貝の海松蛤の掛詞。「なぶる」はからかってひかやすこと。

\* 淡海公と海士が邂逅する場面。海女の右手には鮑がのる。淡海公は身をやつして町人風の姿をしている。

〔三オ〕

鰐、玉をとりて、一天蓋寺の蛸庵和尚へ百両に売りつける。

(蛸庵)「これは開帳に出せば、きつと当たる。二嵯峨の釈迦、

三善光寺といふ所を四行けしめ山のひそ榮螺だ。さあ

百両で手を打つた。おれも足を打う。」「(鰐)「安いものだが、五鰐彼無しに百両であげませう。」



三才

○語釈 (一) 井上隆明氏『喜三二戯作本の研究』解題「天蓋はタコの隠語、蛸庵和尚は沢庵をもじる」(二) 洛北嵯峨清涼寺の釈迦如来像。江戸で開帳があると大勢が参拝した。『燕石雜志』(文化八年(一八一七)刊)卷之三「明和七年の夏、洛北嵯峨清涼寺の釈迦如来、回向院にておがまれ給ふほどに、ことしは雨気なくて、炎暑のたへがたきものともせず。結縁の爲にとて、参詣の老弱いく億万人といふをしらず」(三) 安永六年と安永七年に回向院で信濃善光寺の開帳があった。特に安永七年の阿弥陀如来の開帳の際、見世物も出て大変賑わったという。↓(参考)(四)「しめかけ山の」と続く、赤本にも見られる言語遊戯の変形か。しめしめ、という意味で、嵯峨清涼寺や善光寺の開帳に並ぶ人気となろうという意か。魚体処理の「活締め」とも絡めているか。(五) なにがなし(何彼無)と鰐

を掛けた地口。ともかく。

\* 謡曲「海士」では竜宮の八大竜王に面向不背の玉が献上されるが、ここでは先の鰐鯨が天蓋寺の蛸庵と取引する。灯笼型の厨子に玉が収まっている。謡曲「海士」に「龍宮にいたりて宮中をみれば其高さ。三十丈の玉塔に。かの珠を籠めおき」とある。ちなみに、室町後期に書写された現存最古の大織冠絵巻(薄雲御所慈受院門跡所蔵)にも灯笼型の屋根が付いた玉が描かれている。また、蛸の後ろには竹に雀が描かれているが、『礼記』月令第六に「鴻雁来賓すめ爵入大水為蛤」とあり、雀が海に所縁あるものと認識されていた。『和漢三才図会』にも同様の話が載る。

(参考) 曲亭馬琴『燕石雜志』卷之三

「安永七年の夏の頃、信濃なる善光寺の阿弥陀如来、これも回向院にておがまれ給ひけり。近在近郷いへばさらなり。彼此なるわかきものども、老たるものども、あさまだきよりくる、まで、みな大念仏して参る事、いとく夥しなんでしょういふべうもあらず。両国橋のあなたこなたに、見せ物多く出けり。とんだ靈宝と名づけて、乾魚乾物何くれとなくとりあつて仏をつくり、或は鳥獸の形を作りならべてみます。」

『日本随筆大成』第二期一九、吉川弘文館、一九九五年)  
 ※大田南畝『増訂半日閑話』にも同様の記述あり。

〔三ウ〕

開帳 本尊釈迦如来 面向不背之玉 唐高宗皇帝守本尊 飛ダ  
 靈宝等 右来亥四月朔日ヨリ〔於〕 当寺令開帳者也 龍都  
 八足山 天蓋〔寺〕

〔通行人一〕「これは珍しい開帳だ、流行ませう。」  
 〔通行人二〕「飛んだ靈宝とはなんのことだか三飛んだこと  
 だ。」

○語釈 (一) 安永六年に両国広小路で行われた、開帳の靈  
 宝に見立てた見世物。(二) 思いもよらないものだ。

\*開帳を告知する建札の前に擬人化された魚たちが集つてい  
 る。海の中という設定である。

〔参考〕崔京国氏「戯作における開帳の見立物研究―いわゆる  
 「とんだ靈宝」の受容―」(『国際日本文学研究会会談録』十



三ウ

六号、一九九三年十月)によると、「黄表紙、浮世絵等には背

景に開帳を告示する建札が立っている絵をよく見かける。ある  
 いは橋の前、あるいは人が集まる市井などにいくつもの建札が  
 一緒に立っていて、何人かの人がそれを眺めている、という絵  
 である。『武邊大秘録』に、『開帳二付高札之文言不同之事』と  
 あるごとく、その形式はさまざまであった。しかし、だいたい  
 は開帳という字が大きく、続いて山号寺号、また仏師の名、本  
 尊の名、靈宝等のが記される」という。(三ウ)の魚たちに隠  
 れている部分の字は右記をもとに補足した。

〔四オ〕

翌年の春のことなりけり。竜宮にて開帳のあるについて、一な  
 んぞ金儲けせんといふ亀が思ひつきにて、四国へ猿を買出し



四オ



に行きけるに、佐治兵衛、猿となりたるに相對して連れて帰る。

(龜)「どうぞ十五両で行つてくだされ。」

(佐)「おれは容貌こそ猿なれ、人よりは知恵がある。なんでも芸はやるものではない。おれが行けばきつと当たりをとることさ。その代りに安くしては三気がないぞ。三十二目なら行きませうかへ。」

○語釈 (一) 亀が猿を竜宮に連れていくのは『猿の生き胆』に拠る。(二) 気が進まない。(三) 二十両のこと。「目」は金子の単位「匁」の略で、一の位が零の数の時にのみ用いられる。一匁＝一兩。

\* 亀甲紋様の羽織を着た亀が商売のために猿となった佐治兵衛を買い付ける場面。佐治兵衛はお遍路の旅姿のままであるが、「二才」と異なり、体は猿化している。

〔四ウ・五才〕

四月になれば、面向不背の玉の開帳始まりしに、大はやりにて貴賤群集しける。

(見物客)「此お釈迦様はどち、から拝んでも真向きにお見へなされませす。」

面向不背玉

靈宝道

飛魚「我が先祖の三尊仏になられし。」と喜ぶ。

(鰻)「おらが親父は仏にはならで二鷹になられた。悲しや〜。」

(鮑)「こちの一家は皆で、三御光仏にな〔ら〕れた。」



五才

四ウ

(榮螺)「死んだものを拜ませるとは、気味の悪いお開帳だ。」

三尊仏

塩引不動尊

枯木二鷹

○語釈 (一) 「三尊仏」の身体に飛魚が用いられている。鰻や鮑も実際の飛んだ靈宝で出品された見世物を踏まえているか。

(二)「枯木ニ鷹」の胴部になっている。(三)三尊仏の光背にある、十二光仏という阿弥陀如来の光明を十二種の仏にしたものか。

\*当時実際に行われた飛んだ靈宝の細工を再現した場面。見世物見物の人々(鰻、飛魚、栄螺、鮑)は細工仏に関連した魚介であり、同胞や親族が見世物になったというのが生々しい。

〔五ウ・六オ〕

一身ぶりこわいる松川猿市

(木戸番)「身ぶり声色じや。今は三八百蔵じや、次は三団十郎

親玉じや。」

(子)「母さま猿市が見たい」

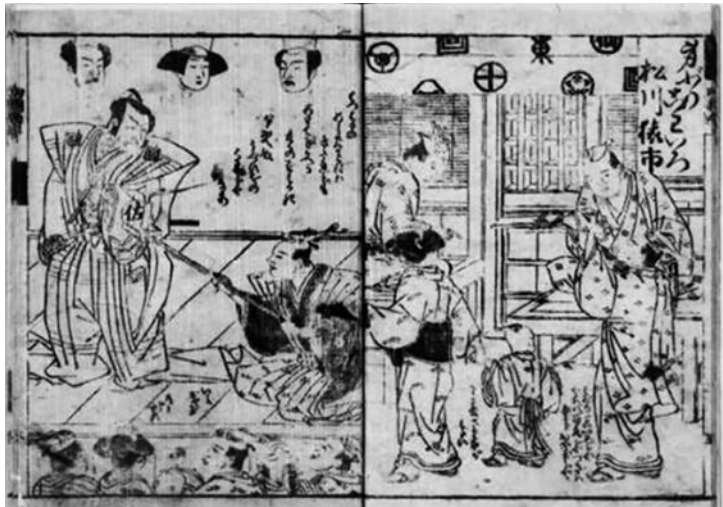
四へ初春の朝ことには来れども逢わでぞ帰へるもとの住処に

(佐治兵衛)「ハテ心得ぬ鶯の声じやなあ。」

(見物客一)「いよ、親玉。」

(見物客二)「エ、と申ます。」

○語釈 (一)安永・天明期に中州新地で評判となった声色づかい(物真似)の大道芸人、松川鶴市に当て込んだもの。喜三二作『景清百人一首』(天明二年刊)でも、四代目団十郎の景清の演技を真似ていた亀市(鶴市のもじり)が捕えられる場面がある。(二)二代目市川八百蔵(一七三五―一七七七)。(六オ)の上部一番右に面が吊るされている。井上隆明氏『喜三二戯作本の研究』解題「舞台の上に景清などの面を吊るるのは、のちに化けの皮が剥かれる伏線となる」(三)「木場の親玉」の異



六オ

五ウ

称をもつ三代目海老蔵(四代目市川団十郎)(一七一一年―一七七八)。(六オ)では佐治兵衛が工藤祐経役の四代目団十郎に扮して芸を披露している。安永五年正月市村座『冠言葉曾我由縁』と安永六年正月市村座『常磐春羽衣曾我』では、四代目団

十郎が工藤祐経と景清を演じ、二代目八百蔵も五郎役などで出演している。(四)『曾我物語』巻第五「十五、鶯・蛙の歌の事」に拠る。

\*右図では鼠木戸の前で見世物の呼び込みをする木戸番や魚の親子が描かれる。右の木戸番の手には木戸札(入場券)が握られている。上部には団十郎の三升紋や八百蔵の三升の中に八の字の紋、岩井半四郎の丸に三つ扇紋など、役者の紋が描かれる。左図は舞台で佐治兵衛が猿真似狂言を披露する。舞台道具の面明り(差出)によって顔が照らされている。

(参考)明和八年から寛政元年まで、大川と箱崎川の分流点の三俣を埋め立てた中州新地が存在した。納涼地として、様々な出店や猿の軽業や松川鶴市の声色などの見世物があり、その様子は『放屁論後編』や道楽散人無玉作『中州雀』(安永六年刊)、『梅翁随筆』(著者未詳、寛政年間(一七八九〜一八〇二)成立)、山東京山作『蛛の糸巻』(弘化三年(一八四六)成立)「かり宅中洲」など様々な著作に書かれている。『放屁論後編』や『中州雀』には佐治兵衛の「四国猿」や飛んだ霊宝について触れる部分もあり、本場面への影響も窺える。『中州雀』には「龍宮のこゝに出現したることく、乙姫も川に泛て、此土にも龍宮ありしかと疑ふ」とあり、『蛛の糸巻』にも「三夏の比は岸のぞみたる茶見世の軒に提灯をかけ渡したるが水面に映するさま、遠目には竜の都のこゝに浮み出でたるかとおもふ」とあり、中州新地は竜宮と重ねられていたことが分かる。

〔六ウ・七オ〕

六十日の開帳、日延べまで済みければ、此開帳、竜宮城へ上が  
りて、一八大龍王はじめ、乙姫も拝み給ふ。  
天蓋寺の住持蛸の入道、釈迦の像を守り奉り、竜宮城へ上る。



七オ

六ウ

(蛸庵)「此玉を日本より取りに参ると申沙汰あれば、しばらく御城ひとへ止め置かれくだされ候へ」と願ふ。

○語釈 (一) 八大龍王は『法華経』説法の座に列したという八種の竜王のこと。このうち、第一が難陀龍王で、草双紙に度々登場する。式亭三馬『式亭三馬自惚鏡』(寛政一三年一八〇一)刊「思ひもよらぬ天道様と竜宮の親玉難陀龍王、地獄の大人閻魔大王なり。近年草双紙に度々道具に使うふ故」とある。

\* 中央に面向不背の玉を安置し、唐土風の姿の八大龍王と乙姫が線香を供えて祈願をする。蛸庵和尚も同席し、玉の保管を依頼する。幸若舞「大織冠」では八大龍王の総王が「我らは、既に海底の竜王たりといへど、五衰三熱隙もなく」と語り、「三熱の苦」から解放されるために「五寸の釈迦の霊仏」(面向不背の玉)を奪うとする。

### 〔七ウ・八オ〕

乙姫、猿の芸を御慰みに見給はんとて、ある時召されしに、佐治兵衛役者の身ぶりを思入れしてお目に掛けんと言ふを、一猿回しの亀は兼ねて焼きもちを焼く男焼、龍王の御城にては役者の身ぶりは叶わずと偽り、二一通りの猿の芸ばかりお目に掛けける。腰元海鼠、「あの猿回しは三一枚絵の八百蔵によふ似ましたね。」四天竺てんな百済国より普賢文殊の召されてさるわんな、五てんつくてんく。乙姫猿回しの亀、絵に描きし八百蔵に似たりとて、六人知れず思ひ染め給ふ。佐治兵衛乙姫



八オ

七ウ

を見て、哀れ生涯の思ひ出に一度契りを込めんと思ひ込みける。  
○語釈 (一) 猿に芸をさせる大道芸人。(二) 猿曳はもともと馬の病氣平癒のための宗教的な芸であった。本場面で見せる佐治兵衛の舞も神事的なものだろう。(三) 八百蔵の姿が描か

れた浮世絵。(四) 猿曳唱歌の文句。狂言「靱猿」に「百済国にて普賢・文殊の召されたる猿と獅子とは御使者のもの」とあるほか、『駿国雑志』巻之七「猿屋町並猿引の事」に紹介される歌「し、のまへ」冒頭には「かんのし、ともふするは天ちくとれがはくさいこくなりふげんもんしゆのおいのりなされたし、なれば」(阿部正信編『駿国雑志』一冊、吉見書店、一九〇九年)とある。(五) 鳴り物の太鼓の音。(六) 壬生忠見「恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか」(『拾遺和歌集』恋一・六二一、『百人一首』収載)を踏まえる。

\*乙姫が佐治兵衛らの曲芸を見る。左右には腰元の海鼠と、お多福顔の河豚が控えている。黄表紙では喜三二作「桃太郎後日断」(安永六年刊)に登場する下女「おふく」や、十返舎一九作「河童尻子玉」(寛政一〇年)の海女「おふく」など、しばしばお多福顔と名前を結びつけた人物が登場する。部屋には青海波や波など、竜宮らしい装飾が施される。佐治兵衛猿は烏帽子と袖なし羽織を着用し、幣を持って舞う。後方では袴姿の亀が鞭と手綱を手にして控えているが、その顔は二代目八百蔵の役者似顔絵風に描かれている。

〔八ウ・九オ〕

それより乙姫、亀のことを忘れかね給ひ、腰元海鼠が取り計らひにて文をやり給ふ。

(海鼠)「此返事の通りなれば、晩に忍んで参るでござりませう。

一 御門番の海月を抱き込んで忍ばせてお逢せ申ませ



九オ

八ウ

(乙姫)「ほんにそれは嬉しいの。」

佐治兵衛、乙姫を見初めしより思ひに耐へ兼ね、乙姫の御殿の辺を徘徊して海鼠が海月を頼むを立ち聞、して道に待ち伏せ、

亀の忍びくるを散く、二打擲して追ひ返し、その翌晩、姫君の館へ忍び入る。三亀は鞘打ちに頭を打たれ、殻を打ち壊す。

(佐)「二太じるし太いの根め、思ひ知つたか〜。」

(亀)「許してくれ。明日は柿でも蜜柑でもたくさん振る舞いませう。」

○語釈 (一)「猿のいきぎも」に登場する。(二)なぐること。

(三)猿が亀の甲羅を打ち壊す件は、黒本『亀甲の由来』(奥村板、宝暦四年(一七五四)頃刊)にある。生き胆を陸に置き忘れたという猿を陸に送り届けたところで他の猿仲間からいじめられ、「盲亀の浮き木」の如く、浮き木に背を預けて竜宮に流れ着く亀が描かれている。(四)肝が太い、凶々しいという意味の江戸語「太い」に「根」を付けた流行語。

\*乙姫と腰元海鼠は亀に文を送るが、佐治兵衛がその文を奪い、刀で亀の額の甲羅を殴りつける。亀の額の甲羅から血が噴き出す。「八ウ」の背景の水面には海藻のようなものが、「九オ」には樹ではなく珊瑚が描かれている。舞台が竜宮であることを示す工夫がなされる。

### 〔九ウ・十オ〕

翌日佐治兵衛は八百蔵が身にて忍び行き、海月を頼む。

(佐)「某は日本にて市川八百蔵と申もの。乙姫様を見ぬ恋に憧れ、一日本をば死んだ分にして遙くと参りました。」

どうぞ乙姫様にお目見へがしたいが、二良い知恵は鱈の生け盛り、海月さん。」



十オ

九ウ

(海月)「俺も門番だから、ちと検問さへしたら、三首尾は吉村屋となりそふなものだ。」

海月、四南簾一遍着服して海鼠に此事を語る。

(海月)「昨日の晩、五亀印の忍んで見へるはづが、どう風が

変はつたる、音も沙汰もない故お姫様は今日は六散  
くお氣探み。七自体、龜にお氣のあるのも中車に似  
たから。」

(海鼠) 「八劣つての事。九生へ抜き八百蔵なら十優曇華の龜  
の上を行くのじや。そうく申立て逢わせ申しませ  
う。」

(海月) 「まづ龜よりはよつほど粋な男と決まったものさ。」

○語釈 (一) 二代目八百蔵は安永六年七月三日、四十三歳  
で夭折。当時多くの人々から悼まれ、追善本や死絵が複数刊行  
された。(二) 「良い知恵はないか」と魚料理の鱈の生け盛りを  
掛ける。鱈は魚肉を細かく刻んで酢味噌や調味酢で和えた料理  
で、生け盛りはその盛り付けをいう。(三) 吉村屋は二代目八  
百蔵の屋号で、「首尾は良し」と「吉村屋」の地口。(四) 二朱  
銀の異称。八枚で一両に値する。(五) 人名や事物名の下略形  
につける隠語の一種。(六) ひどく。(七) そもそも。地体。(八)  
龜は八百蔵より劣るということ。(九) 生粋の。ここでは本物の、  
くらしいの意味。(十) 諺「盲亀の浮木優曇華」を踏まえており、  
珍しいことに遭遇することに例えられる。例え八百蔵似の龜で  
も、本物の八百蔵には叶わない。乙姫の気持ちもきつと本物の  
方に向くだろうということか。

\* 佐治兵衛は八百蔵の面と紋付きの羽織を身に付け、頭巾を  
被った通人風の姿で乙姫の屋敷を訪れる。菖蒲草紋の袴姿で出  
迎への門番の海月は腰元海鼠と相談し、本物の八百蔵が来た  
(実は偽物) と思つて乙姫のところへ取り繋ぐ。珍客である八

百蔵を優曇華と称するが、同時に関連語である「盲亀の浮木」  
から、八百蔵似の龜が「浮氣」されることも読者は連想できた  
かもしれない。

「十ウ・十一ウ」

乙姫喜び給ふこと限りなく、閨へ招きてしつぱりと契り給ふ。

(乙姫) 「これはまあ夢ではないか、いつぞ嬉しうござんす。」

(佐) 「私も遠くと焦がれて参りし甲斐ありて、これほど嬉  
しいことはござんせぬ。」

(海鼠) 「もし、お姫様。龜印が聞いたら「これくでござん  
しやう。」

兩人後朝の別れを惜しみて戯れの折から面と鬢抜けて落ちけれ  
ば、猿なる故、乙姫三肝を消し、それより患ひ給ふ。

(佐) 「三南無三宝、四段切りに味噌を付けた。此お情けは忘れ  
ませぬ。五味噌付け鱈で六おさるばく。」

(乙姫) 「のふ、恐ろしや。」

○語釈 (一) あからさまに言えないときに用いる指示語。

乙姫の浮気をたしなめる。(二) 肝をつぶす。(三) 仏・法・僧  
の三宝に帰依する意で、その三宝に呼びかけ仏の救いを求める  
言葉。しまった。(四) 「段切り」は物事が終わりの部分。「味  
噌をつける」は失敗する意味で、情事の最後に本性が発覚して  
失敗したことをいう。(五) 浅葱鱈から派生した語か。陰曆三

月四日はアサリと浅葱を酢味噌で和えた鱈供え、雛人形を仕舞  
う風習があるのに加え、出替わりの日でもあった。『川柳評万



十一オ

十ウ

句合（明和七年桜四）「あさつきを下女は泣き泣き替へて喰い」（上）「おさらば」と猿の掛詞。

\* 右図では、佐治兵衛猿が八百蔵の面を付けており、乙姫と床に入る場面となるが、左図の後朝の場面では、佐治兵衛猿の



十二オ

十一ウ

〔十一ウ・十二オ〕  
ひめまめのひのかつを  
姫君の傳鯉の介、段々詮議しけるに、海月と海鼠が取り持ち

足元には八百蔵の面が落ちており、正体が発覚してしまう。



し事頭あらわれければ、龍王大なまこきに怒いかり、一海鼠なまこも海月くらげも骨ほねを抜ぬかれけり。鯉なまこは「君きみの御なまこ為なまこじや。尋常じふじやうに白状はくじやうせよ。もしも二陳ちんずるものならば海鼠なまこは三滋味さんじゆいにしても白状はくじやうさせん。」と、後のち、藁わらで首くびをしめるやうに詮議せんぎする。

(海月)「何事なにも私わたくしが諷ふんり。サア海鼠なまこ殿どのもこうばれた上うへは包つづまず申し上げなさい。」

乙姫おとひめそれより病やまひの床とこに伏ふし給たまふが、かの猿さるの顔かほが五いふ断だ目めにちらく見みへて、いよゝ重おもり給たまふ故ゆへ、様さま々々に療りやう治じあれども、更さらに印しるしなし。御医おんい者しや六む烏賊くわじやくの甲庵かうあん申まうけるは、「これ全ぜんく御氣おんき病びやうなり。かの猿さるを捉とらへさせ、七しち生せいき胆たんを取りて服くわさせ申まうさば、たちまち御平癒おんへいゆあらん。」と申まう上ある。

(龍王)「氣病びやうの性せいなら胆たんを食くわさせん。」

(烏賊の甲庵)「八はち犬いぬに噛かまれたものには犬いぬの肉にくを食くわせ、火傷やけどを火ひであぶるの道理どうりでござります。」

○語釈 (一)「猿さるのいきぎも」に拠よる展開ていげんで、ここでは海月くらげだけでなく、海鼠なまこも骨ほねを抜ぬかれるところが笑わらいを誘いざなう。(二)偽いつはりりを言うこと。(三)江戸時代えどじだいに流行りやうした海鼠料理なまこぢり。細切こぎりりに煎いり酒さけをかけ、わさびを添そえた刺身さしみ。(四)人見必大ひとみひだ『本朝食鑑ほんていしきかん』(元禄十年げんろくじふねん一六九七)刊 鱗介部之三りんけいぶのさん「海鼠なまこ」に「稻草いなぐさ」に弱よわいとある。藁わらが海鼠なまこを溶とかすという俗信しやくしんもあり、山東京伝さんとうきやうでん『小紋雅話せうもんがやわ』(寛政二年刊かんせいにねんかん)「くしこ(申海鼠まうなまこ) つなぎ」にも「此小紋こせうもん、藁わら灰汁はいじゆにて洗せんうときは台無たいむしになる」とある。(五)絶たぎえ間まなく続つくこと。(六)イカが持つ甲殻こうかくにちなんだ名前なまえ。(七)「猿さるのいきぎも」に拠よる。(八)詳細しんじゆ不明ふめい。

\* (右図) 傳の鯉なまこの介けいが海鼠なまこと海月くらげを問といたです。(左図) 龍王りゆうわうが医者いしや烏賊くわじやくの甲庵かうあんを呼よび、乙姫おとひめの病びやうを相談さうだんする。

〔十二ウ〕

藤原淡海公ふじわらのたんかい、海士あまと契ちぎりを込こめ、男子なんしをもふけ給たまひ、一竜宮りゆうぐうへ取とられし玉たまを取り返かへしくれよと頼たのみ給たまふ。後のちに二房前ふさぎまへの大おほ臣おんと申まうせしは此若君このわかぎみの御おんことなり。

(淡海)「三福徳さんふくとくの百年目ひゃくねんめだと思おもつて行いつてくれよ。」

(鯉なまこ)「四よ此お子を御世継おんよつぎぎにお立たたなれますならば、玉たまを取とりに参まゐりませう。これは五命ごめいを的あてに懸かけての仕事しごとでござります。」

○語釈 (一)玉取り説話たまとりせつわの展開ていげん。(二ウ) (一)参照さんしやう。(二)奈良時代ならじだいに実在じつざいした公卿こうけい。藤原淡海公ふじわらのたんかい不比等ひひたうの第二子だいにしで、北家きたけ



十二ウ

の祖となる。玉取り説話では海女との間に出来た子として登場する。(三) 福徳の三年目ともいう。福徳の神は三年ごとにめぐってくることから、思いがけない利益や好運を得ること。

(四) 謡曲「海士」。「もし此珠を取り得たらば。此御子を世継の御位になし給へと申し、かは」(五) 命がけて働くというの諺。

\*海女は息子を跡取りとするのを条件に竜宮へ面向不背の玉を取り返しに行くこと約束する。「二ウ」の淡海公は江戸の町人風の姿で描かれたが、ここでは公卿らしく直衣姿で描かれる。海女は丸鬘を結び、江戸の既婚女性の姿である。

### 【十三才】

猿生き胆を取らるゝことを聞ゝ、自ら訴へ出る。

(鯉の介)「二さるとは奇特なことじや。なんと新しかるふが。」



十三才

(佐)「きみが一日の情けに私が三百年の命を差し上げます。生き胆でも死に胆でもお望み次第に召し上られ、御本復あるやうに願ひ奉ります。」

○語釈 (一) 指示語の「然りと」と「猿」をかけた洒落で、赤本にも度々見られる。「さるとは難所」(赤本「桃太郎昔話」五ウ)(二) 一日の情けに百年の命を捨つという諺。『白氏文集』「燕子楼詩」徐州の尚書、張愔の愛妾盼盼の故事に拠る。男のわずか一日の愛情のため女の一生涯を棒にふることだが、ここでは佐治兵衛の方が身を捧げる。

\*佐治兵衛が袴姿で傳の鯉と対面し、自ら生き胆を乙姫に献上する旨を伝える。

### 【十三ウ・十四才】

一竜宮の習いに、死人を忌めば、まして物の命を取ることは不へて、鯉も躊躇いなければ、猿は面倒になり、自ら腹を裂き、生き胆を取り出して渡しける。此時、鯉は海士の話を唄ひながら見物していたりしに、日本より海女来りて、玉を奪い取り、佐治兵衛が腹へ押し込め、繩の端を佐治兵衛に結びつけ、引いたりし声をかければ、人々喜び上げたりけり。猿は腹の内より、かの四国にて食ひける猿の胆を取り出しければ、もとの如く人間となりける。

(佐)「これ〱海女へ、三乳の下を掻き切るはきつい無益といふもの。その玉をば俺が腹の中へお入れなさい。どうして空いているものだから、そうしなさい。」



十三ウ

十四オ

(海士)「近寄るとこれで刺身にするよ。」  
 (鯉の介)「刺身にされては気がない。玉を一ツ四傷めば済む事だ。たゞ何事も知らぬが仏。見逃しにしてくれう。」

○語釈 (一) 謡曲「海士」「龍宮の習に死人を忌めば。あた

りに近づく悪龍なし。約束の縄を動かせば。人々よろこび引きあげたりけり」に拠る。(二) 赤本「猿のいきぎも」に「生き胆を取るときは玉とりの謡でまぎらかそう」という台詞が既に存在するが、喜三二は『親敵討腹鞍』で兎が生き胆を取り出す場面でも同様の趣向を用いた。(三) 玉取り説話での左記\*の展開を無益と評する。(四) 損をすれば。

\* 原話では珠を取り戻してきた海女が追手の龍から逃れるために、自ら乳の下を掻き切つて珠を隠し入れて絶命するが、ここでは佐治兵衛が猿の生き胆を取り出した腹の穴に面公不背の珠を入れることで海女も助かる。海女の腹には「約束の縄」が巻かれており、小刀を持って振り返る。

〔十四ウ・十五オ〕

一玉わ知らず、海士人は海上へ浮かみ、ほかに一人の男浮かみ出で、腹の内より面向不背の玉を取り出して、ありし次第を物語り、玉をお渡し申ます。

(海士)「良い時に参り合わせまして、私の幸せでござります。」

(淡海)「三持料の胆には相違がなければ傷口を縫わせたら助かるう。早く三縫泊屋へやりて腹を縫わせよ。」

かくて佐治兵衛、腹の傷日を経て癒へければ、淡海公の御家来となり、子孫めでたく栄へ、海女も国母と仰がれるぞ、めでたけれ。

○語釈 (二) 謡曲「海士」の一節、「珠は知らずあま人は海上に浮び出でたり」(二) 持前の。元々ある人間の胆のことを



十四ウ

十五オ

指すか。佐治兵衛は猿の時に人と猿の生き胆の両方を持ち合わせていた。(二三) 衣装に刺繍や摺箔などの加工をする職人。傷を縫うのに医者と呼ばないところが笑いである。

\* 志度の浦に海女と佐治兵衛が帰還する。佐治兵衛は腹の中

から面向不背の玉を取り出し、海女が彼の功績を淡海公に伝える。膝元には引き上げられた際の縄が置かれている。

〔十五ウ〕

乙姫、猿の胆を服し給ひ、たちまち本復ありければ、龍王、亀を婿養子にして乙姫に添わせければ、喜ぶこと限りなし。亀も猿にうち碎かれしところ、此節本復して、万世までも変わらじと契りけり。

此所、所作事大できく。

喜三戯作印

\* 亀と乙姫が結ばれることを示す場面。乙姫は針糸を手にしつつ、亀甲紋様の羽織を引き合っている。黒本『亀甲の由来』



十五ウ

では、猿たちに打ち砕かれた亀の甲羅を乙姫らが蜀江に縫って修復し、亀甲の始めとしている。

参考文献

- 寺島良安著『倭漢三才図会』吉川弘文館、一九〇六年
- 竹内照夫著『礼記』上、新釈漢文大系二七巻、明治書院、一九七一年
- 前田勇編『江戸語の辞典』講談社学術文庫、一九七九年
- 日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇〇—二〇〇一年刊
- 上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門『日本人名大辞典』講談社、二〇〇一年
- 北村孝一監修『故事俗信ことわざ辞典』第二版、小学館、二〇一二年
- 鈴木重三・木村八重子編『近世子どもの絵本集』江戸編、岩波書店、一九八五年
- 木村八重子・宇田敏彦・小池正胤校注『草双紙集』（新日本古典文学大系 八三）岩波書店、一九九七年
- 野々村戒三編・大谷篤蔵補訂『謡曲二百五十番集』赤尾照文堂、一九七八年
- 麻原美子・北原保雄校注『舞の本』（新日本古典文学大系 五九）岩波書店、一九九四年
- 恋田知子釈文・解説『大織冠絵巻 薄雲御所慈愛院門跡所蔵』勉誠出版、二〇一〇年
- 中村幸彦校注『風来山人集』（日本古典文学大系 五五）岩波書店、一九六一年
- 市古貞次・大島建彦校注『曾我物語』（日本古典文学大系 八八）岩波書店、一九六六年
- 山東京山編『蛛乃糸巻』（国立国会デジタルコレクション）  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2606929>
- 式亭三馬作『式亭三馬自惚鏡』（国会デジタルコレクション）  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892923>
- 国書刊行会編『江戸時代文芸資料』第一、一九一六年
- 竜田舍秋錦編『日本随筆大成』第二期一「梅翁随筆」、吉川弘文館、一九七四年
- 安田健編『江戸後期諸国産物帳集成』第七巻、科学書院、一九九六年
- 阿部正信編『駿国雑志』一冊、吉見書店、一九〇九年（国会デジタルコレクション）  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/765114>
- 谷峯蔵解説『遊びのデザイン—山東京傳『小紋雅話』』岩崎美術社、一九八四年
- 吉井始子編『江戸時代料理本集成 翻刻』第四巻、臨川書店、一九七九年
- 人見必大著『本朝食鑑』島田勇雄訳注、平凡社、一九八〇年 五月刊
- 松下幸子『図説江戸料理事典』、柏書房、二〇一六年

画像…新日本古典籍総合データベース「龍都四国尊」

(東京都中央図書館特別文庫室加賀文庫蔵)

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100061918/viewer/1>

(ふるしゅう・るい 博士後期課程)